

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (12)
テーマ：感謝表現の歴史

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第 12 回目は、明治大学教授の田島優先生による「感謝表現の歴史」と題する講演であった。田島先生は日本語史を専攻しており、今回は日本語の感謝表現の歴史の変遷を古代・中世後期・近世後期に分け、その歴史の変遷、並びに変遷の過程に見られる、(1)発想法の変化、(2)感謝の言語行動におけるシステムの変化について、説明した。まず中古から中世にかけての感謝表現は恥ずかしさを表明するもので代表的表現は「かたじけなし」で、その発想法は「恐縮」であり、次に中世後期からは「ありがたし」という代表的表現が用いられ、その発想法は「評価」であり、最後に近世後期から気遣いを意味する「すみません」が用いられるようになり、その発想法は「配慮」となった、という。なお、これらの発想法の共通基盤として「困惑」があったが、この点は夙に柳田国男が同様の結論を述べている。

具体的な語彙資料として、キリスト教宣教師によるキリシタン版文献の『日葡辞書』、『伊曾保物語』、『平家物語』、『太平記』、『落葉書』、『日本大文典』を調査し、使用場面については狂言の『大蔵虎明本』(1642 年書写)を参照した。

また、感謝という言語行為は中古から中世後期まで下位から上位への単一方向で使われており、上位から下位へは喜びの表現や労りの表現が使用されていたが、近世になって上位からも感謝表現が用いられるようになり、身分の上下を問わない双方向的なものとなっていき、そのため、上位からと下位からとは表現を異にする必要性が出てきた。具体的には単一方向であった頃に「かたじけなし」が用いられ、これがお礼の言葉、あるいは、ある事に対して謝意を表す言葉として使われていた。当時、上位から下位へは「嬉し」や「悦喜」、「満足」などが用いられていた。ただし、『続日本紀』の「宣命」には天皇が天神に用いたり、物故した藤原不比等や藤原永手に用いたりしたという。ところが、上位から下位への感謝表現として「かたじけなし」が用いられるようになってから、下位からの新しい表現として「ありがたし」が利用されるようになった。この「ありがたし」は神仏など神聖なものや僧侶などへの表現であって、「有難し」という漢字表記が示すように、こんなことはめったにないという、相手の厚意を評価する表現であった。また、「かたじけなし」が多用されるようになると、その敬意が下がるので、新語が使われるようになり、漢語の利用による「過分」という分不相応を意味する語彙が利用されるようになり、

「勿体なし」や「冥加なし」という表現も使われるようになった。「すみません」は相手に迷惑をかけたという相手への思い遣り、つまり配慮に基づいた表現である。他の様々な表現も、困惑→評価→気遣いという、この発想法の流れに沿って生じてきている。評価、気遣いにおいてもその根底に困惑が存在しているのである。

近世後期になると、社会的な安定により、身分差の縮小が始まり、相手を気遣うようになってきた。上位からの「きのどくな」に対して、下位からは謝罪表現の「すみません」が使用されるようになった。「きのどくな」は贈答の応答の最後に受領した上位者が発言する語彙であり、「すみません」は表現主体の心理がすっきりと澄み切っていないという意味の謝罪から転じて感謝の表現となった。また、近世後期には、遊里が新しい感謝表現の発信地となってくる。具体的には洒落本が資料となり、上方の「だんだん」や「おおきに」といった程度副詞による感謝表現が使用され、北前船による海路によって西日本全体にかなり早いスピードで伝播した。なお、「おおきに」は江戸で使用され始めたが定着せずに、上方に伝わり、そこで流行した。江戸・東京では、副詞の「どうも」が使用されるようになる。

感謝を表す語には、感謝表現として生み出されたものはない。既存の語が、上位からの厚意ある行為に対して使用され、慣用化したものである。それぞれの語の語源を考えることによって、その時期における感謝の発想法が明らかにできるのである。

(ウェブサイト：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(日本語原文：齋藤正志 日文系教授)